復興知事業「浪江町と連携した『復興系フィールドワークプログラム』」を行いました
（2026/11/14）

テーマ：復興知事業、東日本大震災、福島の復興
会　場：福島県浪江町など
URL：https://bosai-hrd.org/
https://furec.hp.peraichi.com/

11 月 14 日朝 7 時 15 分、学生にしてはとても早起きですが、全員遅刻することなく川内キャンパスを出発しました。道中の車内では、学生全員が今回のプログラムに参加した経緯や福島に対する印象、フィールドワークを通じて学びたいことなどを順番に発表しました。「震災や原発事故についてもっと理解を深めたい」「復興の現状を自分の目で見てみたい」といった声も聞かれ、学生たちの高い関心がうかがえました。また、引率教員からは、通過する市町においてどのような災害があったのか、放射線の影響はどうだったのか、復興はどのように進められてきたのかといったレクチャーも行われ、現地に向かう道中から学びの機会となりました。

途中、常磐自動車道の南相馬鹿島サービスエリアに立ち寄り、現地での活動をスタートしました。教員からは、同サービスエリアの成り立ちや利用状況、震災後に果たしてきた役割などについて説明が行われ、さっそくメモを取る学生の姿も見られました。また、学生たちは小腹が空いたようで、地元産品や軽食を買い求める姿もありましたが、こうした日常的な消費活動も地域経済を支える大切な復興の一端であることを教員から説明され、学生たちも興味深そうに耳を傾けていました。

9 時 30 分、予定より若干早く、地域活動拠点「FUTAHOME」に到着しました。現地で観光業を通じた地域活性化に取り組む F-ATRAs の方の案内でまち歩きを行い、復興が進む町並みや新たに整備された施設、震災前から残る風景などを見学しました。学生たちは説明に熱心に耳を傾けるだけでなく、自ら積極的に質問を投げ掛ける場面も見られました。まち歩きの終了後は、5 つの班に分かれ、「双葉の復興のためのアイデア」「復興に向けた提言」をテーマとしたグループワークを実施しました。帰路のバス車内で発表を行うことになっていたこともあり、各班とも真剣な表情で意見を出し合い、付箋を使いながら議論を深めている様子が印象的でした。





（次頁へつづく）

「FUTAHOME」で昼食を取った後は、再びバスに乗り、震災遺構である請戸小学校の見学に向かいました。当時の校舎や展示資料、説明文などを通じて、震災当日に学校で起きた出来事や避難行動の重要性について学びました。津波が校舎に到達した高さを目の当たりにした学生たちは、その脅威と被害の甚大さを実感するとともに、防災や減災について改めて考える機会になったようでした。





その後は、最後の目的地である大熊町のCREVAおおくま内にある「中間貯蔵事業情報センター」に向かいました。情報センターで係官から中間貯蔵事業の概要や現状について説明を受けた後、実際に中間貯蔵施設区域に入域しました。広大な施設のスケール感に圧倒されるとともに、東京電力福島第一原子力発電所事故によって発生した除去土壌等の県外最終処分に向けた取組の難しさや課題についても理解を深めることができました。情報センターに戻ってからは活発な質疑応答が行われ、「施設の建設に当たって、跡地利用を意識して計画したのか」「最終処分量を減らすための技術開発の見通しはどうか」といった質問も挙がり、学生たちの学びに対する意欲の高さが感じられました。





帰路の車内では、一日の活動の振り返りとして、各班の代表２名による発表を行いました。復興に向けたモビリティの課題や移住に向けた価値の構築促進、交流人口の拡大につながるイベントの企画など、学生ならではの視点のアイデアが数多く聞かれました。また、「実際に現地を訪れたことで、ニュースだけでは分からない現状を知ることができた」「今日得た知識を持ち帰って周囲の人に伝えたい」といった感想も共有されました。学生たちが福島の復興を自分事として受け止め、主体的に考えてくれたことが伝わる発表ばかりであり、今後の学習や地域との関わりにつながることを期待させる、大変有意義なフィールドワークとなりました。

文責：御手洗潤（空間デザイン戦略研究分野）、小野寺秀明（グリーン未来創造機構）